



森の魔物たち

遅 沢 克 也*

いたいけな娘の死体が、ラップ地区の集落から2kmほど離れた養魚池近くのマングローブ林で発見されたことがある。この娘は、何度か森へ逃亡することがあり、当時も2～3日前から行方不明となっていて、村人の捜索が行われていたやさきのことであった。

この娘の他にも、森へ逃亡したことがある者、時時そうした行為に出る者がいて、*bonboang* にかかっているのだと言われている。

調査地のサゴ生産村の周囲には、森・土地を支配している精霊 (*punna tana*) がいる。樹、アリ塚、旧自然堤防・砂丘跡のわずかな高みなどがその住み処なのだとされている。

そうした精霊とは別に、精霊と人間の間に位置すると思われる摩訶不思議な者たちがいて、私の調査村は極めてにぎやかな世界となっていた。*pakoni*, *parakan*, *po'pok*, *jujun dapo* 等である。村人の体験を集めて得られる彼らの像は実に人間的であり、村人は一様に恐れながらも、時には彼らに同情さえするのである。勇敢な者は、彼らに金品を要求することさえある。

pakoni, *parakan* は通常は人間の姿と変わりなく、村人と結婚することもある。彼らは、満月の夜に動物 (巨大な水牛; 白いネコ; ヤギ) や籠 (ココヤシの葉で編んだ籠) に変化し、人をたぶらかす。高床家屋の台所の下の湿った場所に好んで出現し、泥や汚物を *sokko* (モチ米でつくった食べ物) と感じがいをして食べるという。また人の肝を喰うことで非常に恐れられているが、村人は彼らは一種の病気にかかっているかわいそうな者たちであると考えている。

po'pok は翼を持ち、危篤状態の者の肝を喰って

飛び去ると言われている。重病人のいる家族は *po'pok* が来るのを見はる。

jujun dapo は頭に火を灯しながら、雨の日に出現し、カエルの目玉を喰う。雨の夜、森の周辺では、この灯が揺れ動くのが見えるのだという。

実は私は好運にもこの *jujun dapo* と遭遇したことがある。現場で鶏のふ化実験をしていて遅くなった。雨の降る午前1:00ごろ、現場に残るサゴ仲間の反対を押し切って一人自転車の下宿している区長の家に戻るときのことである。前方に二つの奇妙な灯が波うちながら移動している。私が近づくと一旦高床家屋の陰になり消えていたが、数メートル手前から私の行く手を横切ってサゴ森の方へ消えていった。確かに頭に火 (黒ずんだ赤い火、ちょうどグラン・ガランというタバコのラベルの色) を灯した二人の男だった。

その顔はみごとに灯の陰になっていて見る事ができなかったが、ラップ区の住民でないことはその姿・格好から明らかであった。

その後、恐怖心と自分自身の護身のために村の古老に魔物との接し方を学ぶことにした。

その方法は簡単に言えば、彼らと会話をする事、むやみに恐れずに、むしろ彼らの存在を認めて会話することである。「互いに危害を加えないようにしようではないかと悟せばいい。それでも、彼らが迫ってくるような時はこちらが威嚇すれば大抵の魔物は逃げてゆくものだ。彼らにとって人間とは恐ろしい存在であるのだ」と語ってくれた古老は、最後に、最近では森が少なくなって、そうした魔物もめっきり姿を現さなくなっていると言っている。

南スラヴェン州の中で最も開発の遅れている地域であるとされるマランケ郡も近年、西部のロンコン河下流域と東部のバレアセ流域の郡境からしだいにトランス・イミグレーションの圧力を受けて広大な

* Katsuya Osozawa, Faculty of Agriculture, Kyoto University, Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto 606, Japan



養魚池が急速に拡大し、マングローブ林は切り尽くされてしまった。



養魚池の魚獲後、いくばくかの魚を得て家路につく子供。エビは法外な値で売れるため子供たちの口に入ることは少なくなった。

低湿地林が伐採されつつある。こうした現場では、主にジャワ人が奇妙な死に方をするという噂を聞くことがあるが、住み処を追われた魔物たちは、いったい何処へ行くのであろうか？

私は先きの *jujun dapo* に遭遇した時の彼らの姿があまりにも人間的であったことが気になってしかたがない。自然科学を学ぶ者にとって安易に魔物の存在を認めたくないという気持ちがあるが、私の目でとらえた事実は動かしようがない。と、ふっと思い出したのは、柳田国男の『山の人生』の中にでている話である。村人がお化けに遭遇して、恐怖のあまり撲殺してみると、その顔は十数年前に神隠しにあって消えた女の顔に酷似していたという話のことである。

熱帯の低湿地林の周囲にも、冒頭に書いた、いたけな娘のように *bonboang* にとりつかれて森へ逃げた者がほんとうに息を潜めながら住んでいるのかもしれない。

この娘が行方不明になっていたとき、養魚池の番を夜っびてしていた村人が彼女と遭遇しエビを盗みに来たと勘違いをして、殴りかかるという悲劇があったという。

かつては、魚獲の際に雑魚としてかかるエビには

価格はなく、魚獲を助けに集まる村人や子供たちに分けられていた。それが、近年、日本の水産業者が法外な値で買付けをするため1キロ当たりRp 12,000もするようになってきている。金のなる樹として急速に作付面積が広がった丁字でさえ Rp 6,000～Rp 7,000/kg である。我がサゴ新工場から出荷する精製サゴデンプン価格の実に50倍以上の値であることを考えれば実に高い値がつけられていることがわかる。

そのため魚獲近くなると、かなり注意して徹夜で池の番をするようになってきている。

また、この高値にひかれて新たにエビの養殖を主眼とする養魚池の造成が増え、マングローブ林は切りつくされたと言ってもよい状況になってきている。もはや、薪炭材として、調査地からマングローブを出荷することは不可能であろう。

上流からは、トランス・イミグレーションの圧力、海岸からは養魚池造成という圧力の下でサゴ生産村周辺の森は今急速に減少している。私としては、サゴ森の周辺に住む魔物たちとも共存しうようなサゴ生産村の将来を考えつづけたいと思う。

(京都大学大学院農学研究科在学)